

平成27年7月8日

各 位

公益財団法人 大同生命国際文化基金

2015年度（第30回）大同生命地域研究賞
受賞者の決定および贈呈式の開催

公益財団法人 大同生命国際文化基金（大阪市西区江戸堀1-2-1 理事長：喜田哲弘）では、本年度の大同生命地域研究賞の受賞者を下記のとおり決定いたしました。

つきましては、贈呈式を以下のとおり開催いたします。

受賞者ならびにこの賞に関する資料を添付いたしますのでご覧ください。

なお、30回の贈呈を迎えたことを機に、地域研究の将来の発展に一層資するために「研究奨励賞」の受賞者をこれまでの毎年2名から3名にしました。

記

1. 贈呈式

日時：平成27年7月24日（金）午後2時～

場所：一般社団法人 クラブ関西

大阪市北区堂島浜1-3-1 1 電話：06（6341）5031

2. 受賞者

1) 大同生命地域研究賞（副賞300万円ならびに記念品）

京都大学 名誉教授

田中 二郎 氏

2) 大同生命地域研究奨励賞（副賞100万円ならびに記念品）

横浜市立大学 国際総合科学部 教授

柿崎 一郎 氏

秋田大学 国際資源学部 教授

縄田 浩志 氏

静岡大学 人文社会科学部 教授

楊 海英(大野 旭) 氏

3) 大同生命地域研究特別賞（副賞100万円ならびに記念品）

大阪外国語大学 名誉教授、中部大学 名誉教授 宮本 正興 氏

京都精華大学 名誉教授

楠瀬 佳子 氏

(共同受賞)

以上

照会先：公益財団法人大同生命国際文化基金 事務局（北迫、市村）

電話 06（6447）6357 / Fax 06（6447）6384

2015年7月

大同生命地域研究賞について

1. この賞を設けた趣旨

大同生命国際文化基金は、大同生命保険相互会社(当時)の創業80周年記念事業として、外務大臣の認可により1985年3月に設立された財団法人であります。その目的は「国際的相互理解の促進に寄与する」こととし、そのためいくつかの事業を行ってきました。

この賞は、「地球的規模における地域研究」に貢献した研究者を顕彰するもので、様々な地域の人と文化に対する理解を究極の目的としている点で、本財団の設立目的と一致します。それはいわば国際的相互理解を考える上で最も基礎的な部分を担うもので、医学に例えれば臨床医学に対する基礎医学のような関係にあたります。こうした理解に立ち、関係学界の協力を得て、この賞を創設しました。

2. 対象とする地域

アジア、アフリカ、中南米、オセアニアとする(ただし、発展途上地域または周辺・辺境地域)。

3. 賞の内容

この賞は、次の3部門で構成されています。

(1) 大同生命地域研究賞

多年にわたって地域研究の発展に著しく貢献した研究者1名に対して、賞状、副賞300万円ならびに記念品を贈呈するものです。

(2) 大同生命地域研究奨励賞

地域研究の分野において新しい展開を試みるとともに、今後さらに活躍が期待される研究者3名に対して、賞状、副賞100万円ならびに記念品を贈呈するものです。

(3) 大同生命地域研究特別賞

対象地域を通じて、国際親善、国際貢献を深める上で功労のあった者1名に対して、賞状、副賞100万円ならびに記念品を贈呈するものです。

4. 選考

- (1) 選考については、本財団が委嘱する選考委員で構成する会議により決定されます。
2015年度の選考委員は次の5名です。

(五十音順)

総合地球環境学研究所 名誉教授	秋道 智彌 氏
国立民族学博物館 教授	印東 道子 氏
日本女子大学文学部 教授	臼杵 陽 氏
大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 理事	小長谷 有紀 氏
東京外国語大学大学院総合国際学研究院 特任教授	島田 周平 氏

- (2) 候補者の推薦については、全国の大学、研究機関等の研究者に推薦委員を委嘱し、推薦委員より書面による推薦を受けることを原則としています。

以上

2015年度

大同生命地域研究賞受賞者一覧

◆大同生命地域研究賞 (副賞300万円ならびに記念品)

「アフリカの狩猟採集民研究と地域研究に対する国際的貢献」に対して

京都大学 名誉教授

たなか じろう
田中 二郎 氏

◆大同生命地域研究奨励賞 (副賞100万円ならびに記念品)

「タイを中心とする東南アジアの交通・鉄道に関する社会経済史の実証研究」
に対して

横浜市立大学国際総合科学部 教授

かきざき いちろう
柿崎 一郎 氏

◆大同生命地域研究奨励賞 (副賞100万円ならびに記念品)

「中東・北東アフリカにおける未来志向型の地域研究と
アラビア語による出版を通じた研究資源の共有化」に対して

秋田大学国際資源学部 教授

なわた ひろし
縄田 浩志 氏

◆大同生命地域研究奨励賞 (副賞100万円ならびに記念品)

「モンゴル及び中国西北部に住む諸民族の歴史と文化に関する研究」に対して

静岡大学人文社会科学部 教授

よう かいえい おおの あきら
楊 海英 (大野 旭) 氏

◆大同生命地域研究特別賞 (副賞100万円ならびに記念品)

「アフリカ文学の研究・紹介およびアフリカ・日本間の文化交流活動」に対して

(共同受賞)

大阪外国語大学名誉教授、中部大学名誉教授

みやもと まさおき
宮本 正興 氏

京都精華大学 名誉教授

くすのせ けいこ
楠瀬 佳子 氏

2015年度
大同生命地域研究賞

田中 二郎 氏
(京都大学 名誉教授)

略 歴

田中 二郎 (たなか じろう)

1. 現 職 : 京都大学名誉教授
2. 最終学歴 : 東京大学大学院社会学研究科文化人類学研究室 (1970 年)
3. 主要職歴 : 1970 年 京都大学霊長類研究所助手
1976 年 同上 助教授
1981 年 弘前大学人文学部教授
1986 年 京都大学アフリカ地域研究センター教授
1998 年 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授
2004 年 同上 定年退官、京都大学名誉教授
現在に至る
4. 主な著書・論文 :
 - ① “*The Bushmen: A Half-Century Chronicle of Transformations in unter-Gatherer Life and Ecology*” Kyoto University Press & Trans Pacific Press, 2014
 - ② “*An Encyclopedia of /Gui and //Gana Culture and Society*” (共編著) Kyoto University, 2010
 - ③ 『ブッシュマン、永遠に。—変容を迫られるアフリカの狩猟採集民』 [昭和堂, 2008]
 - ④ 『遊動民ノマッド—アフリカの原野に生きる』 (共編著) [昭和堂, 2004]
 - ⑤ 『カラハリ狩猟採集民—過去と現在』 (共編著) [京都大学学術出版会, 2001]
 - ⑥ 『続 自然社会の人類学—変貌するアフリカ』 (共編著) [アカデミア出版会, 1996]
 - ⑦ “*African Study Monographs*” Supplementary Issue No. 22. (共編著) Kyoto University, 1996
 - ⑧ 『最後の狩猟採集民—歴史の流れとブッシュマン』 [どうぶつ社, 1994]
 - ⑨ 『ヒトの自然誌』 (共編著) [平凡社, 1991]
 - ⑩ 『アフリカを知る事典』 (共編著) [平凡社, 1989]
 - ⑪ 『自然社会の人類学—アフリカに生きる』 (共編著) [アカデミア出版会, 1986]
 - ⑫ “*The San Hunter-Gatherers of the Kalahari: A Study in Ecological Anthropology*” University of Tokyo Press, 1980
 - ⑬ 『砂漠の狩人—人類始源の姿を求めて』 [中央公論社, 1978]
 - ⑭ “*A San Vocabulary of the Central Kalahari: //Gana and /Gui Dialects*” Tokyo University of Foreign Studies, 1978
 - ⑮ 『人類の生態』 生態学講座 25 (共著) [共立出版, 1974]
 - ⑯ 『ブッシュマン—生態人類学的研究』 [思索社, 1971 (新装版 1990)]
5. 備 考 : 1974 年 理学博士 (京都大学)

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

業績紹介

「アフリカの狩猟採集民研究と地域研究に対する国際的貢献」に対して

田中二郎氏の学問的な功績は、長期にわたる詳細な現地調査にもとづいてブッシュマン社会の研究をおこない、その社会と文化に関する詳細な民族誌的記述を書きあらし、彼らの平等主義的な社会関係や文化的な態度に関する総合的な考察をおこなった点にある。

同氏は独立（1966年9月）直後のボツワナ共和国に出かけ、16ヶ月におよび狩猟採集民ブッシュマンの現地調査を行った。この調査は、日本におけるアフリカ地域研究の本格的開始となった京都大学の学術調査の一環として行われたものであり、サル、類人猿の社会から人間社会への進化の糸口を探る目的をもった学術調査であった。この調査のなかで同氏のブッシュマン研究は、人類社会の始源的な姿を探り出す研究として位置づけられるものであった。それは人類進化に関する研究の中心地であった京都大学理学部を卒業後、東京大学大学院社会学研究科修士課程で文化人類学を学んだ同氏にとってまさに打って付けの研究課題であったといえる。

同氏はその研究成果を『ブッシュマン—生態人類学的研究』（1971）として発表した。それは、現存の狩猟採集社会に共通した生計様式の分析研究が、人間社会の進化の考察に価値ある資料を提供しうることを示した書として、個別のブッシュマン社会研究にとどまらず、生態人類学の理論的確立に大きく寄与するものとなり高く評価されることになった。後に増補改訂された”*The San Hunter-Gatherers of the Kalahari: A Study in Ecological Anthropology*”（1980）は、国際的に高く評価され、その後のブッシュマン研究の古典となった。

この研究成果は、幾つかの留保が必要であることを認めつつも人類進化史研究と文化人類学とを結びつける架け橋になる分野を切り拓くものとなり、世界の狩猟採集民研究の発展に大きな貢献をした。この研究を出発点として開始されたピグミーなど他の狩猟採集社会との比較・分析の研究において同氏は、狩猟採集社会に関する生態人類学的研究を推進し、狩猟採集社会を人類進化史上に位置づけることに貢献したのである。

さらに同氏は、急速に変容するブッシュマンの社会や文化を、彼らを取りまく経済的、政治的な社会環境の変動との関連において明らかにする研究を精力的に推し進め、貨幣経済の浸透という状況のもとで、平等主義の原則がいかなる変質をこうむるのかを分析すると同時に、少数民族の文化的アイデンティティをサポートする体制の必要性を論じた。この研究は、『最後の狩猟採集民—歴史の流れとブッシュマン』（1994）にまとめられ、狩猟採集社会の変容に関する研究に大きなインパクトを与え、その後のブッシュマン研究の多方面の展開の基礎を創った。

狩猟採集民研究にとどまらず、同氏は、日本におけるアフリカ地域研究や生態人類学的研究を牽引する中心人物として、つねに第一線で活動し、多くの業績をあげてきた。それらの成果は、『自然社会の人類学—アフリカに生きる』(1986)、『アフリカを知る事典』(1989)、『ヒトの自然誌』(1991)、『続 自然社会の人類学—変貌するアフリカ』(1996)、『カラハリ狩猟採集民—過去と現在』(2001)といった編著書等に結晶している。さらには、生態人類学会会長や日本アフリカ学会会長を歴任し、また京都大学においてはアフリカ地域研究センターや大学院アジア・アフリカ地域研究研究科の設置に中心的に関わり且つセンター長や研究科長としてその運営に携わり、日本のアフリカ地域研究の推進に多大な貢献をしてきた。

その高い人格と見識をもって、国内外における地域研究の発展、学生、若手研究者の育成に尽力してきた功績も非常に顕著なものがある。

よってここに地域研究賞の授与を決定した。

(大同生命地域研究賞 選考委員会)

2015年度
大同生命地域研究奨励賞

柿崎 一郎 氏
(横浜市立大学国際総合科学部 教授)

略 歴

柿崎 一郎 (かきざき いちろう)

1. 現 職 : 横浜市立大学国際総合科学部 教授
〔勤務先電話番号 045 (787) 2234〕
 2. 最終学歴 : 東京外国語大学大学院 地域文化研究科 博士後期課程修了 (1999年)
 3. 主要職歴 : 1999年4月 横浜市立大学国際文化学部 専任講師
2003年4月 同上 助教授
2005年4月 同上 国際総合科学部 准教授
2015年4月 同上 教授
現在に至る
 4. 主な著書・論文 :
 - ① *Trams, Buses and Rails: The History of Urban Transport in Bangkok, 1886-2010*. Chiang Mai, Silkworm Books, 2014, 436p.
 - ② 『タイ謎解き散歩』〔KADOKAWA, 2014〕 325頁
 - ③ 「交通網の発達—自動車依存社会の出現」 綾部真雄編『タイを知るための72章』綾部真雄編 〔明石書店, 2014〕 92~96頁
 - ④ 『都市交通のポリティクス バンコク 1886~2012年』〔京都大学学術出版会 2014〕 530頁
 - ⑤ *Rails of the Kingdom: The History of Thai Railways*. Bangkok, White Lotus, 2012, 214p.
 - ⑥ 「物流史」 社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望: 社会経済史学会創立80周年記念』〔有斐閣, 2012〕 347~360頁
 - ⑦ 『東南アジアを学ぼう 「メコン圏」入門』〔筑摩書房, 2011〕 191頁
 - ⑧ 「自然・地理」他 赤木攻監修『タイ検定』〔めこん, 2010〕 分担部分: 65~116頁
 - ⑨ 「東南アジア大陸部」 小池滋・青木栄一・和久田康雄編『鉄道の世界史』〔悠書館, 2010〕 分担部分: 551~581頁
 - ⑩ 『王国の鉄道 タイ鉄道の歴史』〔京都大学学術出版会, 2010〕 386頁
 - ⑪ 『鉄道と道路の政治経済学 タイの交通政策と商品流通 1935~1975年』〔京都大学学術出版会, 2009〕 488頁
 - ⑫ 「バンコクの都市鉄道」 日本タイ協会編『現代タイ動向 2006-2008』〔めこん, 2008〕 217~241頁 「バンコクの都市鉄道」
 - ⑬ 『物語 タイの歴史』〔中央公論新社, 2007〕 310頁
 - ⑭ *Laying the Tracks: The Thai Economy and its Railways, 1885-1935*. Kyoto, Kyoto University Press, 2005, 327p.
 - ⑮ 『タイ経済と鉄道 1885~1935年』〔日本経済評論社, 2000〕 381頁
- 以上のほか、現在に至るまで論文著書多数
5. 備 考 : 1999年 博士(学術) (東京外国語大学)

業績紹介

「タイを中心とする東南アジアの交通・鉄道に関する社会経済史的実証研究」
に対して

柿崎一郎氏は、現在、横浜市立大学国際総合科学部教授である。柿崎氏は1999年、東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程を修了後、横浜市立大学国際文化学部専任講師・同助教授、国際総合科学部准教授を経て、2015年より現職につかれている。

柿崎氏は東南アジアの地域研究者であり、なかでもタイ国を中心とした交通と鉄道に関する経済史的研究を中心にこれまで研究をつづけてこられた。東南アジアでは、交通・鉄道に関する社会・経済史的研究を目指す研究者は数少なく、こうしたなかで柿崎氏は新しい分野の開拓者として大きな成果をつぎつぎと上げてこられた。柿崎氏の研究業績を一覧してわかるのは、交通の実態と変容の歴史が地域の経済や社会にどのような影響を与えてきたかについての探求が問題意識として貫かれていることである。交通や鉄道に興味をもつものにとり、あるいは東南アジア地域の社会や文化に関心のある研究者や一般の人びとにとっても、交通・鉄道という切り口の面白さを存分に伝えてくれる点でたいへん独創的な研究であるといえるだろう。

世界史的な視野からみても、たとえば北米の大陸横断鉄道やシベリア鉄道、満州鉄道、インド亜大陸における鉄道史などと比較しても、東南アジア地域の交通史・鉄道史の研究は前例を見ない実証研究として大きな貢献を果たしたと位置付けることができるだろう。

周知の通り、東南アジア大陸部では西洋列強の大きな影響を受けるなかで激動の時代を経て、戦後期に大きく経済発展してきた。タイ国は列強による植民地支配を受けることなく、産業化の中軸としての役割を果たしてきた鉄道建設を通じて、強大な王権を背景として工業化・近代化を遂げてきた。柿崎氏はそのタイ国を選び、自らタイの鉄道網を乗り尽くし、情報を収集した。

タイ国ではヒトや物資の移動は陸路における車や水運を中心になされてきたが、経済発展と比例して、乗客層や輸送物資に質的な変化が起こった。すなわち、伝統的な「旅客」輸送の終焉、長距離旅客の出現、貨物輸送品目の変化などを経て、21世紀に入って新たに鉄道輸送が大きく復権しようとしている。さらに、日本におけるような新幹線による高速鉄道計画も進められている。東南アジアの大陸部では陸続きに国家が併存しており、人とモノの移動も越境しておこなわれる傾向がある。グローバル時代に至り、交通を通じた流動現象がさらに顕著にみられるようになった。

こうした時代背景を基盤として、柿崎氏はタイ国の鉄道史に関する研究を進め、処女作ともいえる『タイ経済と鉄道 1885～1935年』（日本経済評論社、2000年）によって

2001年に第17回大平正芳記念賞を受賞している。それ以降、今日に至る15年間に、学術書を7冊（内、英語3冊）、一般書3冊（タイ通史、メコン圏入門、タイ謎解き散歩）、論文40点以上、タイ語の報告書3冊を上梓している。

柿崎氏による学術書の高い生産能力はタイ国の国立図書館、国立公文書館に所蔵されている文字史料を渉猟した賜物である。19世紀後半期から現代にいたるタイの鉄道と道路の政策立案プロセスとその政治的な背景を、鉄道・道路建設の過程、建設後の経済・社会への影響などに焦点をあててつぶさに実証した成果として結実した。

また、『鉄道と道路の政治経済学 タイの交通政策と商品流通 1935～1975年』（京都大学学術出版会、2009年）や『王国の鉄路 タイ鉄道の歴史』（同出版会、2010年）を通じて、19世紀終末期から1990年代にいたる交通史を政治・経済的な指標から、黎明期と「政治鉄道」期、「政治鉄道」からの脱却期、戦時と復興期、転換期を経た鉄道の復権期へと、時代区分を踏まえた分析をおこなっている。

注目すべきは、交通に関して地域間の地理的な距離ではなく、「時間距離」を算定し、それにもとづく商品流通の流れを追跡した手法が経済発展を遂げつつある現代のタイ国における発展モデルの基盤となる情報を提供することとなった点である。この点も地域研究の大きな貢献であるといえるだろう。

以上のような卓越した研究業績に加えて、柿崎氏は日タイ学会での積極的な活動や、学生教育面でも非凡な能力を発揮し、東南アジア研究者として将来を嘱望されている。また、タイ国は日本とも経済、文化、社会面で非常に密接な関係があり、両国のつながりは今後ともに増えることが予想される。柿崎氏の交通研究を通じた学術交流も大いに期待することができる。以上の理由から、ここに柿崎一郎氏を大同生命地域研究奨励賞にふさわしい研究者として選考した。

（大同生命地域研究賞 選考委員会）

2015年度
大同生命地域研究奨励賞

縄田 浩志 氏
(秋田大学国際資源学部 教授)

略 歴

縄田 浩志 (なわた ひろし)

1. 現 職 : 秋田大学国際資源学部 教授
〔勤務先電話番号 018 (889) 3256〕
2. 最終学歴 : 京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程修了 (2003 年)
3. 主要職歴 : 2004 年 鳥取大学乾燥地研究センター講師
2007 年 鳥取大学乾燥地研究センター准教授
2008 年 総合地球環境学研究所准教授
2013 年 秋田大学新学部創設準備担当教授
2014 年 秋田大学国際資源学部教授
現在に至る
4. 主な著書・論文 :
 - ①「紅海産黒サンゴの生態・採取・加工—イスラームの数珠がつなぐ自然と文化」西本真一・縄田浩志編『アラブのなりわい生態系第 5 巻 サンゴ礁』〔臨川書店, 2015〕
 - ②「海洋哺乳動物名にみる家畜観—ジュゴンは「海の成雌ウシ」、イルカは「海の成雌ラクダ」」市川光太郎・縄田浩志編『アラブのなりわい生態系第 7 巻 ジュゴン』〔臨川書店, 2014〕
 - ③「砂漠誌—これからの砂漠研究を切り拓くために」縄田浩志・篠田謙一編『砂漠誌—人間・動物・植物が水を分かち合う知恵』〔東海大学出版部, 2014〕
 - ④「ナツメヤシ栽培化の歴史—栄養繁殖、人工授粉、他作物栽培のための微環境の提供」石山俊・縄田浩志編『アラブのなりわい生態系第 2 巻 ナツメヤシ』〔臨川書店, 2013〕
 - ⑤「砂漠化対処の「負の遺産」にどう立ち向かうか」星野弘方・縄田浩志編『アラブのなりわい生態系第 4 巻 外来植物メスキート』〔臨川書店, 2013〕
 - ⑥*Relationship between Humans and Camels in Arid Tropical Mangrove Ecosystems on the Red Sea Coast*. Global Environmental Research, 2013
 - ⑦干ばつに対する現地住民の生態的・社会的・文化的・宗教的応答—サヘル東端、紅海沿岸ベジャ族における雨乞い儀礼の事例分析から 〔『沙漠研究』23(2), 2013〕
 - ⑧「石油文明の頂点から考える—何を失ってきたのか、何を残していくのか」石山俊・縄田浩志編『ポスト石油時代の人づくり・モノづくり—日本と産油国の未来像を求めて』〔昭和堂, 2013〕
 - ⑨*Exploitation and Conservation of Middle East Tree Resources in the Oil Era. (Nawata, H., S. Ishiyama and R. Nakamura)* Shoukadoh Shoten, 2013 (in Arabic, English, French and Swahili)
 - ⑩*Dryland Mangroves: Frontier Research and Conservation. (Nawata, H. ed.)* Shoukadoh Shoten, 2013 (in Arabic and English)

(次頁に続く)

(前頁からの続き)

- ⑪ *To Combat a Negative Heritage of Combating Desertification: Developing Comprehensive Measures to Control the Alien Species Mesquite (*Prosopis juliflora*) in Sudan.* 『沙漠研究』 22(1), 2012
- ⑫ *Exploitation and Conservation of Middle East Tree Resources in the Oil Era: A Study of Human Subsistence Ecosystems in Arab Societies.* Annals of Japan Association for Middle East Studies 26, 2010
- ⑬ 2つのエコトーンの交差地としてのスーダン東部、紅海沿岸域—ベジヤ族の適応機構を探る [『地球環境』 10, 2005]
- ⑭ *Historical Socio-economic Relationship between the Rashayda and the Beja in the Eastern Sudan: The Production of Racing Camels and Trade Networks across the Red Sea.* Senri Ethnological Studies 69, 2005
- ⑮ 乾燥熱帯沿岸域と牧畜システム—人間・ヒトコブラクダ関係に焦点をあてて [『アジア・アフリカ地域研究』 4, 2005]

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

5. 備 考 : 2003年 人間・環境学博士 (京都大学)

業績紹介

「中東・北東アフリカにおける未来志向型の地域研究と
アラビア語による出版を通じた研究資源の共有化」に対して

縄田浩志氏は、現在、秋田大学国際資源学部国際資源学科資源政策コースの教授である。縄田氏は2003年、京都大学大学院人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻文化人類学講座博士課程を修了後、国立民族学博物館特別客員准教授、鳥取大学乾燥地研究センター准教授、総合地球環境学研究所准教授を経て2014年に現職に着任された。

縄田氏は生態人類学者としてこれまで北アフリカ、中東地域の熱帯・乾燥地域における地域住民の生業に重点をおいた研究にまい進してこられた。とくにスーダンの紅海沿岸域において、ラクダを飼養する牧畜民ベジャ族の社会における野外調査を通じて、多くの研究成果をあげてこられた。その端緒となったのが人間と自然の相互関係をあつかった学位論文「乾燥熱帯の沿岸域における人間・ヒトコブラクダ関係の人類学的研究—スーダン東部、紅海沿岸ベジャ族における事例分析から」（2003年 京都大学）である。飼育されるヒトコブラクダ(dromedary)は物資や人の運搬だけでなく、ベジャ族に乳や肉を提供する重要な家畜動物となっている。縄田氏はヒトコブラクダが浅海でも活動できることを利用して海中に生息する巻貝の採集をおこなうことに注目した。そして、採集された巻貝がアフリカ、中東地域におけるアラブ社会で保香剤として広域に流通することを確かめた。

縄田氏のスーダンから紅海沿岸部、北アフリカにおける調査研究が大きく展開したのは、総合地球環境学研究所に所属して実施した研究プロジェクト「アラブ社会におけるなりわい生態系の研究—ポスト石油時代に向けて」である。本プロジェクトは、スーダン、サウディ・アラビアの紅海沿岸、エジプトのシナイ半島、アルジェリアのサハラ沙漠において、低エネルギー資源消費による自給自足的な生産活動（狩猟、採集、漁撈、牧畜、農耕、林業）を中心とした生命維持機構、すなわち「なりわい」に重点をおき、地域住民の生活基盤を再構築するためのポスト石油時代における自立的将来像を提起したものである。

具体的には、キーストーン（なりわい生態系で要となる種）のうち、植物ではナツメヤシ、マングローブ、外来植物であるメスキートの研究から、乾燥地における在来植物と外来植物の新たな利用法を開発し、化石燃料に依存しない、食料やエネルギーとしての樹木資源の創出を提案した。一方、動物種ではヒトコブラクダ、サンゴ礁、ジュゴンの研究から、乾燥熱帯沿岸域における生物資源管理のための学術的基盤を提示した。縄田氏の主導した総合的な学術研究は高く評価される。

ポスト石油時代というプロジェクト研究の副題がいみじくも表すように、本研究は植物や化石燃料を使って環境に大きな負荷をかけている現代から再び自然エネルギーをた

くみに利用する次世代のエネルギー論として大きな伏線を持っている点に注目しておきたい。ふたたびラクダを使った「なりわい」が将来復興されるだろうという未来先見性の背景には、地域住民の培ってきた在来知識がある。縄田氏が強調する研究の枠組みに地域の在来知があり、1000年以上にわたり受け継がれてきた「なりわい生態系」の叡智の奥深さと、未来への課題を明らかにする視点は、長期的な視点を踏まえた地域研究のあり方として本財団の顕彰する研究に一石を投じるものとなるであろう。

縄田氏による一連の研究成果は現在も継続的に公表されており、その柱となる論集「アラブのなりわい生態系」では、マングローブ、ジュゴン、サンゴなど沿岸のエコトーンから海洋における資源だけでなく、伝統的農耕、樹木栽培、外来植物などの陸域における資源利用にわたって論考が展開されており、熱帯乾燥地域の人びとの適応と生存戦略を広く見渡して実施された研究として評価することができる。

また日本語、英語による研究成果の発信だけでなく、とりわけアラビア語による研究成果の出版は研究者、行政担当者、地域住民が研究資源を共有するうえで、地域と社会的還元に多大な貢献を果たしており、この点は特筆に値するものである。また出版物の一部は多くの写真を取り込んだオール・カラーで構成され、かならずしも識字率の高くない地域の住民が理解を深めるうえでも配慮がなされており、地域研究としてかえがたい役割を果たしている。

以上の点から、縄田浩志氏の研究が大同生命地域研究奨励賞に十分値するものとしてここに選考した。

(大同生命地域研究賞 選考委員会)

2015年度
大同生命地域研究奨励賞

楊海英（大野 旭）氏
（静岡大学人文社会科学部 教授）

略 歴

楊 海英 (よう かいえい)

1. 現 職 : 静岡大学人文社会科学部 教授
〔勤務先電話番号 054 (238) 4501〕
2. 最終学歴 : 総合研究大学院大学 文化科学研究科 博士課程修了 (1994 年)
3. 主要職歴 : 1995 年 関西外国語大学外国語学部 講師
1997 年 中京女子大学人文学部 助教授
1999 年 静岡大学人文学部 助教授
2006 年 静岡大学人文学部 教授
現在に至る
4. 主な著書・論文 :
 - ①『チベットに舞う日本刀—モンゴル騎兵の現代史』〔文藝春秋, 2014〕 414 頁
 - ②『ジェノサイドと文化大革命—内モンゴルの民族問題』〔勉誠出版, 2014〕 482 頁
 - ③『中国とモンゴルのはざま—ウランフーの実らなかった民族自決の夢』〔岩波書店, 2013〕 280 頁
 - ④『植民地としてのモンゴル—中国の革命思想と官制ナショナリズム』〔勉誠出版, 2013〕 256 頁
 - ⑤『*Ulanhu, A Nationalist Persecuted by the Chinese Communists — Mongolian Genocide during the Chinese Cultural Revolution* (afro- Eurasian inner dry land civilization collection 5), Comparative Studies of Humanities and Social Sciences Graduate School of Letters, Nagoya University, 2013, 102p.
 - ⑥『続 墓標なき草原—内モンゴルにおける文化大革命・虐殺の記録』〔岩波書店, 2011〕 336 頁
 - ⑦『墓標なき草原—内モンゴルにおける文化大革命・虐殺の記録』(上巻 276 頁, 下巻 290 頁) 〔岩波書店, 2009〕(第十四回司馬遼太郎賞受賞。2014 年に台湾八旗文化出版社より中国語版出版)
 - ⑧『モンゴルのアルジャイ石窟—その興亡の歴史と出土文書』〔風響社, 2008〕 362 頁
 - ⑨『モンゴルとイスラーム的中国—民族形成をたどる歴史人類学紀行』〔風響社, 2007〕 (2014 年 1 月に文藝春秋ライブラリー) 410 頁
 - ⑩『モンゴル草原の文人たち—手写本が語る民族誌』〔平凡社, 2005〕 273 頁
 - ⑪『チンギス・ハーン祭祀—試みとしての歴史人類学的再構成』〔風響社, 2004〕 358 頁
 - ⑫『草原と馬とモンゴル人』〔日本放送出版協会(NHK ブックス), 2001〕 204 頁
 - ⑬『《金書》研究への序説』〔国立民族学博物館, 1998〕 335 頁
5. 備 考 : 1994 年 博士(文学) (総合研究大学院大学)

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

業績紹介

「モンゴル及び中国西北部に住む諸民族の歴史と文化に関する研究」に対して

楊海英(大野旭)氏は社会主義中国の北部と西北部に住むモンゴル系諸民族の近現代史と文化に関する研究課題をグローバルな視点で発掘し、「北・中央アジア遊牧民族史」という縦の歴史軸と「国際関係」という横の脈絡のなかで再構築してきた。氏の知的関心は広く、深く、その一連の研究成果は国際的にも高く評価されており、日本の斬新な地域研究の一頁を飾るものとして注目されている。

第一に、楊海英氏の研究には鮮明な現地からの視点が貫かれている。彼は終始一貫としてモンゴル社会に豊富に伝わる手写本(古文書)と口伝資料(インタビュー)を同時に駆使してきた。まず、チンギス・ハーンを民族の開祖と見なすモンゴル系諸集団が 13 世紀から維持してきた「チンギス・ハーン祭祀」という政治儀礼に注目した。祭祀と儀礼が北・中央アジアの遊牧民を結束させてきた役割を歴史人類学的手法で解明した。また、「シルクロード草原の道」に位置するアルジャイ(阿爾寨)石窟内に残る仏教文化の年代と性質を特定する際も、考古学者があまり注意を払わなかった出土文書と民間伝承の分析から着手して、遺跡はモンゴル帝国期のものであることを突き止めた。楊海英氏と現地文化財保護関係者の努力が実り、アルジャイ石窟は現在、中国の重要文化財に指定されている。

チンギス・ハーン祭祀そのものと、それに関連する遺物類は近代モンゴル系諸集団の政治的なシンボルともされ、国民国家としてのモンゴル国(旧モンゴル人民共和国)が成り立つ際の争奪の対象となった。こうした近現代史には満洲と内モンゴルに進出した日本も関わっている。楊海英氏は、モンゴル人たちが如何に日本統治時代を経験し、近代化の道のりを歩んできたかを現地の視点から再現している。氏のこうした地域研究は、日本の研究者たちが日本語の資料に依拠して、日本側の営為に重点を置いてきた成果と双璧となり、近現代史の全容解明に大きく貢献している。

さらに、モンゴル人が日本と特殊な近現代的関係を創成してきたがゆえに、のちに 1966 年からの文化大革命期に入ると、歴史の再清算の対象とされた。政府の公文書と「紅衛兵新聞」、それに当事者たちの口述資料に基づいて書かれた『墓標なき草原—内モンゴルにおける文化大革命・虐殺の記録』は日本で版を重ねているだけでなく、モンゴル語と中国語にも翻訳刊行され、英語版と韓国語版も進行中である。民族誌とともに上梓した、7 冊に及ぶ『内モンゴル自治区の文化大革命』資料シリーズは世界各国の現代史研究家から貴重な一次資料として高く評価されている。「20 世紀の 10 大歴史的事件の 1 つ」にカウントされている文化大革命が少数民族地域においてどのように発動されたのか、国際社会と如何に連動していたのかについても、楊海英氏の研究成果は大きく寄与している。

第二に、楊海英氏は日本に留学して、日本における文化人類学的な学問訓練を受けて育った地域研究者であることを申しそえておきたい。彼は、東西冷戦が終結を迎えつつも社会主義陣営の諸国がどのように民主化するのかという転換期の1989年春に我が国に留学した。彼が日本語で書いた『チンギス・ハーン祭祀一試みとしての歴史人類学的再構成』はモンゴル語に翻訳されただけでなく、今や現地において祭祀活動をおこなう際の典拠として位置づけられている。これは、日本の学術研究の成果が、現地出身者を通して、現地へフィードバックしていった好事例であると評価できよう。我が国を根拠地として、国際的に活躍している楊海英氏の活躍は、今後、さらに多くのアジア各国の若者たちにとって、日本においてその研究手法を学び、学術的成果を国際的に発信していく先駆的事例となるだろう。

以上のことから、楊海英(大野旭)氏が一層の発展と可能性を託された研究者であり、地域研究奨励賞にふさわしいと評する。

(大同生命地域研究賞 選考委員会)

2015年度
大同生命地域研究特別賞
〈共同受賞〉

宮本 正興 氏
(大阪外国語大学名誉教授、中部大学名誉教授)

楠瀬 佳子 氏
(京都精華大学 名誉教授)

略 歴

宮本 正興 (みやもと まさおき)

1. 現 職 : 大阪外国語大学名誉教授、中部大学名誉教授
2. 最終学歴 : 京都大学大学院文学研究科言語学専攻博士課程単位取得退学(1969年)
3. 主要職歴 : 1969年 立命館大学専任講師、同助教授
1981年 大阪外国語大学助教授
1985年 大阪外国語大学教授
2002年 同依願退職、同大学名誉教授
2002年 中部大学国際関係学部教授
2012年 同定年退職、同大学名誉教授
現在に至る

この間、大阪外国語大学附属図書館長、中部大学国際関係学部長、同大学院国際人間学研究科長、日本アフリカ学会会長などを歴任。

4. 主な著書・論文 :

- ①『評伝グギ・ワ・ジオンゴ＝修羅の作家－現代アフリカ文学の道標』〔第三書館, 2014〕
- ②『スワヒリ文学の風土－東アフリカ海岸地方の言語文化誌』〔第三書館, 2009〕
- ③『文化の解放と対話－アフリカ地域研究のための言語文化論的アプローチ』〔第三書館, 2002〕
- ④『現代アフリカの社会変動－ことばと文化の動態観察』（共編）〔人文書院, 2002〕
- ⑤『新書アフリカ史』（共編）〔講談社, 1997〕
- ⑥『文学から見たアフリカ－アフリカ人の精神史を読む』〔第三書館, 1989〕

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

5. 備 考 : 2014年 京都大学博士 (地域研究)

略 歴

楠瀬 佳子 (くすのせ けいこ)

1. 現 職 : 京都精華大学名誉教授
2. 最終学歴 : 神戸市外国語大学大学院修士課程終了
3. 主要職歴 : 1987年 関西女学院短期大学経営学科教授
1990年 京都精華大学人文学部教授
2015年 同定年退職、同大学名誉教授
現在に至る
4. 主な著書・論文:
 - ①新装版『ネルソン・マンデラ伝—こぶしは希望より高く』（共訳）〔明石書店, 2014〕
 - ②増補新版『精神の非植民地化—アフリカ文学における言語の政治学』（共訳）〔第三書館, 2010〕
 - ③『わたしの南アフリカ—ケープタウン生活日誌から』〔第三書館, 2010〕
 - ④『増補改訂 南アフリカを読む—文学・女性・社会』〔第三書館, 2001〕
 - ⑤『ベッシー・ヘッド 拒絶と受容の文学—アパルトヘイトを生きた女たち』〔第三書館, 1999〕
 - ⑥『ひとの数だけ文化がある—第三世界の多様性を知る』洪炯圭 (ほん・ひょんぎゅ) 共編〔第三書館, 1999〕

以上のほか、現在に至るまで論文著書多数

5. 備 考 : アフリカ文学会
(African Literature Association 本部アメリカ 現評議員)

業績紹介

「アフリカ文学の研究・紹介およびアフリカ・日本間の文化交流活動」に対して

宮本正興氏は大阪外国語大学、中部大学名誉教授であり、アフリカ文学者として著名である。宮本氏は京都大学大学院文学研究科言語学専攻博士課程単位取得退学後、立命館大学助教授、大阪外国語大学助教授、教授を経て、中部大学国際関係学部教授に就任され、同大学を2012年に退職後、現在に至っている。

楠瀬佳子氏もアフリカ文学者であり、京都精華大学名誉教授である。楠瀬氏は神戸市外国語大学大学院修士課程修了後、関西女学院短期大学経営学科教授、京都精華大学人文学部教授を経て、2015年に名誉教授に就任された。

宮本氏は大阪外国語大学で新設されたスワヒリ語講座の教授を長年つとめ、アフリカ文学の教育・研究に従事した。一方、楠瀬氏は教鞭をとる一方、京都精華大学において第三世界の女性問題に関心を持ち、アフリカ文学・文化論の研究に従事してこられた。

宮本正興・楠瀬佳子両氏は日本におけるアフリカ文学研究のパイオニアであり、その研究業績はすでに高く評価されており、ともに宮本正興・松田素二編『新書アフリカ史』（講談社、1997）によって1998年、第14回NIRA（総合研究開発機構）政策研究・東畑精一記念賞を共同受賞しておられる。

宮本氏の主な業績には『文学から見たアフリカーアフリカ人の精神史を読む』（第三書館、1989）、『文化の解放と対話—アフリカ地域研究のための言語文化論的アプローチ』（第三書館2002）、『スワヒリ文学の風土—東アフリカ海岸地方の言語文化誌』（第三書館、2009）、『現代アフリカの社会変動—ことばと文化の動態観察』（松田素二共編 人文書院、2002）などがあげられる。

楠瀬氏の主な業績には『南アフリカを読む—文学・女性・社会』（第三書館、1994／補改、2001）や共編著『ひとの数だけ文化がある—第三世界の多様性を知る』（洪炯圭（ほん・ひょんぎゅ）共編 第三書館、1999）などがあげられる。同氏は、ヨハネスブルクやケープタウンでの豊富な生活経験から、とくに南アフリカの女性作家を中心に研究と翻訳を進め、代表作として『ベッシー・ヘッド 拒絶と受容の文学—アパルトヘイトを生きた女たち』（第三書館、1999）などがある。

宮本・楠瀬両氏が一貫して主張しているのは文学からアフリカを見ることで、個人が文化・伝統・民族・国家などと切り結ぶ関係が考察できるという視点である。

アフリカ人作家は英語やフランス語など植民地宗主国の言語を用いて表現せざるを得ない苦悩をかかえている。ながらくノーベル文学賞の候補にあげられているケニア作家グギ・ワ・ジオンゴ（Ngugi wa Thiong'o）は、「英語やフランス語で書かれた作品は真

のアフリカ文学とは言えない。真のアフリカ文学はアフリカ人の言語で書かれるべきだ」と主張し、英語での創作活動をやめてギクユ語での創作活動を選択した。

宮本、楠瀬両氏は、共訳『精神の非植民地化—アフリカ文学における言語の政治学』（第三書館、1987／増補新版、2010）、宮本訳『泣くな、わが子よ』（第三書館、2012）などの翻訳を通じてグギの紹介に力を注いできた。宮本氏の近著『評伝グギ・ワ・ジオンゴ＝修羅の作家—現代アフリカ文学の道標』（第三書館、2014）はその集大成といえるものである。

宮本・楠瀬両氏は1976年に砂野幸稔、元木淳子氏など関西在住の同志と「アフリカ文学研究会」を結成した。その目的はアフリカ文学を中心に、広くアフリカの文化、歴史、社会を研究・紹介し、各種の情報の提供に努めるとともに、アフリカと日本人びとの間の交流をはかり、もって国際理解と友好関係の増進に貢献することであった。そのために機関誌『アフリカ文学研究』（年刊）やアフリカ文学研究会会報『MWENGE』（季刊）を発行し、後者は2015年4月現在、すでに42号に達している。また公開の例会活動などを継続してきたが、なかでもおもに東・南アフリカの文学者を招聘するなど、数かずのシンポジウムを開催し、日本・アフリカ間の文化交流に貢献してきたことが特筆すべき点である。

2000年10月には「ジンバブエ・コミュニティ劇団」を招聘し、京都・大阪・東京での公演を主催するとともに、「国際シンポジウム：文化と開発」を京都精華大学で開催した。そのなかで、グギ・ワ・ジオンゴの基調講演と、招聘された Dale Byam (Trinidad, USA)、Ngugi wa Mirii (Kenya, Zimbabwe)、Rugatiri D. K. Mekacha (Tanzania)、Mtumwa C. Mekacha (Tanzania)、Fenson A. Mwape (Zambia) などとともに日本人研究者多数がパネリストとして討論に参加した。

宮本・楠瀬両氏の長年にわたる業績は、研究にとどまらず、文学作品の翻訳、多数の作家との交流をつうじアフリカ文学の紹介に努めてきたこと、およびアフリカ・日本間の文化交流活動をおこなってきたことについて、国際親善、国際貢献を深めるうえで多大な功労があったことは間違いない。

以上の点から宮本正興氏、楠瀬佳子氏の貢献は大同生命地域研究特別賞にふさわしいものとして顕彰したい。

(大同生命地域研究賞 選考委員会)